

俳句雑誌



空

令和3年9月25日発行

第19巻4号

通巻第98号



2021・9

SORA 98号

起伏

柴田佐知子

秋めくや砂丘の傷は風が消し

朝顔を畳む風来る漁師町

学校の田圃に案山子混み合へり

芋虫が見返す貌をもたげけり

満月や船みな島につながれて

灯を消せば月光の部屋新しき

噴き止まぬ伏流水や小鳥来る

風道の幾筋もある芒原

万の鳥渡る外輪山よぎり

戯れにもつとも遠き鬼やんま

草原の起伏のままに霧這ひ来

大花野あちこち踏まれ暮れにけり

牛眠る外輪山に銀河掛け



福岡 高倉 和子

足跡をたどれば沼や黄砂来る

石ころを畦へ抛りて春田打つ

藤の下出て人間の影戻る

包丁の乾く早さや麦の秋

頭を寄せて口開けてゐる燕の子

篝火に大きく見ゆる鶉飼舟

ややこしき家系図黴の匂ひして

死ぬまでの口上長し夏芝居

東京 中田みなみ

床下に鯉の遊べる盆燈籠

秋さびし鏡の中に次の部屋

秋の蠅すこし歩きて次の皿

人くぐるまでは暖簾に秋の蠅

カレーの香漂ひ釣瓶落しかな

剥きくるる掌も有難し丹波栗

月白や亡き師の文字の葉落ち

身に入むや卓袱台囲む小津映画

長崎 荒井千佐代

島避けて船曲がり来る薔薇の昼

特急かもめに吹つ飛びし青田かな

花は葉に老人午後を持って余す

麦熟れて母郷に似たり夕映えも

仲裁に神父の入る水喧嘩

骨壺の中の真闇や薔薇の昼

水打ちし後ゆるやかに刻過ぐる

簾上ぐ五島列島見ゆるまで

埼玉 服部早苗

遠足の巨樹とりかこむ手と手と手

鯉幟あがるを追へる赤子の目

蔦若葉万の蔵書の熟寝して

牡丹散るその夜またたく星の数

鉈の目の深き木仏囀れり

黒蜜を垂らす一皿蝶の昼

人肌のミルクに膜や梅雨の入

十葉や芯の乾かぬ柔道着



北九州 深川淑枝

鳥埋めし小さき盛り土黄雀風

石棺を突き出る草やほととぎす

蟻地獄底に七曜きつとある

火を恋ひていつか火まみれ火蛾落つ

る

嗽する茅花流しを遠く見て

灯の下に白湯吹いてゐる花疲れ

青葉木菟鳴くころ熱き湯につかる

広島 戸栗末廣

遠く聞く音に松風ころもがへ

頂上より浦町のぞみ春惜しむ

葱坊主どこにも行かず誰も来ず

大樟の伐り払はれし鳥曇

ふるさとは海拔五百種選ぶ

田から田へ水ひた走る更衣

明易しエンジン猛る海の色

手相見に開くてのひら晩夏光

福岡 角野良生

そそり立つ雲正面に籐寝椅子

春疾風砂丘を砂の走る走る

たんぽぽの絮へ変身するところ

花茎の棘は幼し薔薇の門

引く波はいつも控へ目桜貝

飛び跳ねて戻る巻尺初つばめ

初燕影追ひつけぬ速さなり

廃校のそして桜の並木道



千葉 原 友 子

奔流のごとく茶摘みの始まれる
 膝丈の開拓稻荷麦の秋
 解体の家具に竹釘ほととぎす
 青葉木菟畑肥えたれば闇の濃く
 白南風や過不足の無き田の厚み

粕屋 吉 田 菫

空蟬の脚の力をぬいてやる
 かはるがはる姉妹の覗く螢籠
 甚平を着ても厳しき父の顔
 アツパツパの中を体の泳ぎをり
 山盛の形代禰宜の捧げゆく

兵庫 えとう 樹果

御身拭ことに口角ねむごろに
 たんぽぽや叱られし子に犬が添ひ
 花吹雪翅あるものもそのなかに
 一面の青田の中へ新幹線
 芥子坊主ゆれ対岸は摩天楼

北九州 河 原 敬 子

境内の花折りて足す花御堂
 献上の鮎の川音寺苑まで
 人去れば山羊の鳴く声夕永し
 松籟の抜くる街道夏兆す
 濠の中まで城垣の反り濃紫陽花

熊本 松 田 明 子

一寸の全身使ひ稚鮎跳ぶ
 水音と共に稚鮎の堰越ゆる
 実演も時に交へて農具市
 囀の家に入りくる暮しかな
 生れ在所の話はづみて植木市

福岡 秋 津 令

春泥にからまれてゐるハイヒール
 青々と鳴いてゐるなり巢立鳥
 山寺の蜂や百花の蜜集め
 包み紙より畳まれし蛇の衣
 側溝より尾のなき蜥蜴這ひ上がる

福岡 栗 原 京 子

伐採と宣告の木に鴉の巢
 学舎に猫が一匹夕桜
 花衣恋の噂もなかりけり
 春の雨雀の水浴びに足りず
 積善の女になつく仔猫かな

大宰府 西 住 三 恵 子

天に地に深く一礼みどりの日
 稜線を雲ゆつたりと夏に入る
 たつぷりと昼寝の後や母訪はな
 生返事の子をもてあます日の盛り
 車輪までみがく少年夏夕べ

福岡 永淵 恵子

子燕の親呑みこまんばかりなる
嘘泣きの肩笑ひだすくらんぼ
蟻ひとつつぶしたる指匂ひけり
違ふ夢見てゐる二人螢の夜
地獄絵を見し昂ぶりに毛虫焼く

大宰府 山本 則男

花守が大地の呼吸確かむる
花冷や海の底より平家琵琶
たちまちに大きくなりぬ花筏
錆び付きしままの画鋏や黄砂降る
花満ちてこの世ふくらみ来たりけり

長崎 松尾 龍之介

見納めの病室の窓帷の花
あらあらあれと束の間を笹落葉
公園に絆いろいろ金銀花
雲に乗る船笛もあり明け易し
薔薇開く時計廻りにほぐれつつ

須恵 苑 実 耶

せり出して川面に蓋をせるさくら
聞き上手についつい本音わらび餅
花蜜柑通ひて一人守る生家
戸襖の軋む生家やおぼろ月
昨夜の雨もう筍と呼べぬ丈

直方 曾根 富久恵

朝ざくら妣と母校を同じくす
和菓子屋の幟の色もさくらかな
青空が泡立つてゐる八重桜
靴紐を直す少年落花浴ぶ
直ぐ終はる家の解体夕桜

大阪 井上 和子

たんぽぽの絮吹き散らす反抗期
ゴム跳びの足裏の反りや風光る
一木の早蕨に声挙げにけり
喧噪を離れてよりの花筏
夏兆す波の韻きを貝釘

兵庫 青木 朋子

寒暖差の家のうちそと春の昼
春惜しむ乳白色の湯につかり
まさか猫が怖がるなんて石鹼玉
少しくらゐ旅をしたいな葱坊主
父に似る指関節や夏みかん

福岡 あさなが 捷

原色のすぐにほどけし水中花
角伐の鹿はいきなり倒さるる
やはらかき裸身かわきし蛇の衣
夕霧や吐息のかかるほど近く
鬼いつも毛嫌ひさるる葛の花

兵庫 岡村尚子

永き日や水平線に船を置き
葬列のしんがりに躓き竹の秋
耕人に山鳩のこゑ近くなる
晩学や虫出しの雷一度きり
卯の花腐し猫が遊んでくれにけり

直方 石橋幾代

葉桜や木箱に納め漆椀
吹き込めば皺の伸びたる紙風船
少し振り量確かむる種袋
春日傘たたまず会釈交はしけり
雨のあと元に戻りし蟻の列

直方 吉田悦子

傍らに妣の針箱春深し
もつと母に甘えてみれば桜草
大切に子が育てたるチューリップ
アイスティー娘の愚痴に頷きて
鯉幟揚げてはならぬ隠れ里

粕屋 秋千晴

ふらここを見つけてすぐに駆け出せり
初夏や産着を絞る手の余る
水槽にすこし水足す薄暑かな
にぎりより亀が首出す花菖蒲
片蔭を縦一列に帰りけり

北海道 押田裕見子

失ひし齒の数いくつ目借時
またひとり逝つてしまひぬ夕桜
過去よりも短き未来花は葉に
留守番の子へ蓬餅桜餅
束縛の指輪を外す夕酷暑

兵庫 林徹也

妣の座に犬伏しにけり夏座敷
水無月の海にはりだす能舞台
麦秋や土間開け放つ村の鍛冶
麦秋やひとすぢ紫電滑走路
衣更へて歩幅大きく修道女

北九州 兒玉充代

鳶舞ひて視野余すなき初夏の海
約束の時間へ急ぐ白日傘
軽鳧の子のつらなり走る風の中
夕薄暑半音高きクラクション
大粒の星の出揃ふ露台かな

長崎 仲里奈央

損ばかりする役回り桜薬
桜薬降る綺麗事ばかりなり
運命といふほどでなく花筏
くつついたままの女子達躑躅咲く
風薫る平凡といふしあはせよ